

Title	茂山忠三郎家蔵『翁秘書』
Author(s)	茂山, 恭仁子
Citation	演劇学論叢. 2010, 11, p. 462-469
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/97472">https://doi.org/10.18910/97472</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## ■資料紹介

### 茂山忠三郎家蔵『翁秘書』

茂山 恭仁子

ここに紹介するのは茂山忠三郎家蔵の翁伝書二点のうち的一点である。同家に所蔵される翁伝書二点のうち、一つは『翁秘書』（卷子、一巻、もう一つは『翁口伝極秘書抜』（卷子、一巻）である。この二点の卷子本は金剛右京氏（明治五年〜昭和十一年）が所蔵していたものであったが、右京夫人より三世茂山忠三郎良一が形見として譲り受けたものである。右京氏は昭和十一年に逝去されたが、その納棺の際、立ち会った能楽師に伝来の伝書が形見として渡され、それ以外の坂戸金剛家に伝わる書はすべて棺の中に入れられて焼失したという。

金剛右京氏と茂山忠三郎家は深い縁がある。二世茂山忠三郎良豊は右京氏の仲人をし、また右京氏は三世茂山忠三郎良一の仲人をしたという関係にあり、茂山家の過去帳には親族の並びに右京氏の名が入れられている。現忠三郎によれば、跡継ぎに恵まれなかった右京氏から金剛家へ養子に入らないかという話があったが、その時、三世忠三郎良一は、子息の良介（昭和二十一年に戦死）と俵一（現忠三郎）の兄弟で狂言をさせたいという

想いから、丁重にお断りをしたという。この他にも生前の右京氏から三世忠三郎がゆずられたものに、「三番三」を舞う時に用いる「腰板」がある。これは普通は木でできていたが、右京氏から譲られたものは皮でできており、現忠三郎によれば、非常に使い安い板だと言う。

ここに紹介する『翁秘書』は天地二〇・五センチ、長さ七三・五センチ、表紙は草花模様の布表紙。料紙は鳥子紙の美本である。題簽なし。内題は「翁秘書」。書体は全体的に楷書に近い読みやすい字で、末尾に「宝永二歳<sup>丙</sup>九月吉曜日／金剛大夫坂戸久明」と金剛大夫久明の署名がある。金剛大夫久明は『重修猿楽伝記』によると、正徳五年（一七一五）の没で、享年は不明。

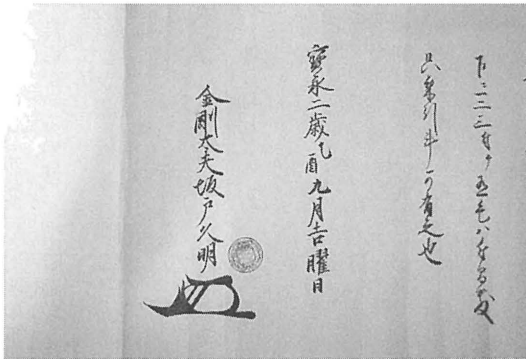
この奥書の署名と本文の文字は同筆であり、本文も金剛大夫久明の自筆と認められる。もう一つの翁伝書は「交野長命久敦」の署名があるものだが（長命久敦は南山城を拠点にしていた金剛座の役者らしい）、これについては別途紹介の機会を持ちたいと思う。

この『翁秘書』には翁が演じられる際の作法が詳細に記されている。その内容を本書の見出しで記すと、「翁秘書」『翁之次第』「極秘書」『翁舞の内』「鈴之事」『風流之事』「開口之事」『翁所作之事』「太夫後見之事」となる。

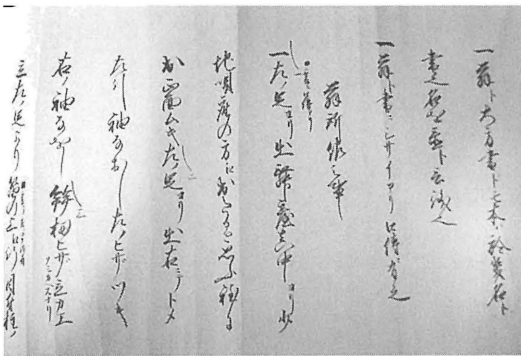
このうちの「翁舞の内」には、翁舞の足拍子を「天地人」の三才で説明する神道吉田家の翁秘説が認められる。吉田家の翁秘説は江戸時代に観世・宝生・喜多の三流の役者たちが伝授を受けており、その秘説は金剛流の役者にも影響を及ぼしている

ことが指摘されていたが（天野文雄氏『翁猿楽研究』）、本書は金剛大夫の自筆であり、本書によって吉田家の翁秘説が金剛流にも及んでいたことが確実になったと言える。

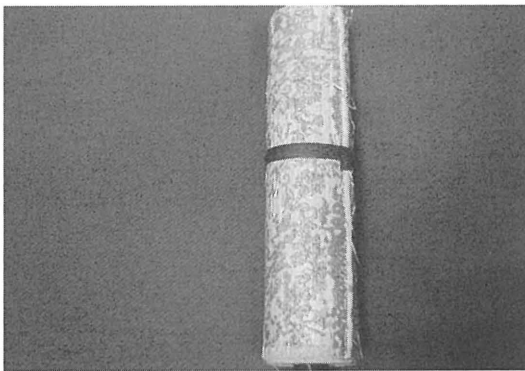
なお、天理図書館蔵『翁大事御相伝人数書』によると、紀州徳川家の家臣で能役者でもあった徳田藤左衛門隣忠は宝永二年（二七〇五）仲夏に、吉田家から「翁の大事」を伝授されているが、本書の奥書年記はその四ヶ月後である点に注意される。徳田隣忠はまず渋谷道修を師としたが、のちに金剛大夫久明を師とし



【翁秘書】奥書



【翁秘書】「翁所作之事」



【翁秘書】

ているから（御世話筋秘曲）、久明の筆になる本書に吉田家の翁秘説の投影があるのは、徳田隣忠から仕入れた知識によつてい  
る可能性もあろう。

以上のように、本書は吉田家の翁秘説が金剛流にも及んでい  
たことを確実にする資料であり、江戸後期以後の金剛家の翁秘  
説を伝える点で貴重な資料と言えよう。また、冒頭の《翁》上  
演前の故事や開口についての記事も資料として貴重なものと言  
える。

〔凡例〕

- 一、翻刻は基本的に底本に忠実であることを旨としたが、読  
解の便を考慮して、適宜、句読点、返り点等を付した。
- 一、本文中の旧字体や異体字は新字体に改めた。
- 一、本文中には「口伝」を「口イ」としている箇所があるが、  
これはすべて「口伝」とした。
- 一、本文中の「一」（四十五）とある部分は朱書である。  
また、これ以外には朱筆の箇所はない。

翁秘書

- 一、先当日早旦行水。入塩。
- 一、着「装束浄衣」、加持咒文。口伝。
- 一、手水之咒文。口伝。

一、御面箱置所。

北方ニ設レ机ヲ、南向ニ奉レ安置ス之ヲ。狂言置レ之ヲ。兼而箱之  
中ニ八寸太麻ヲ納置取レ之ヲ、扨ニ我身ニ次千歳、脇、狂言  
共ニ太夫ヲ以テ太麻ニ、

扨之咒文。口伝。

陰日咒文。口伝。

一、件被串取、扨、御面箱。箱ニ四手有。今ハ不レ附レ之ヲ。

一、神供、神酒備レ之ヲ。以テ被串ニ扨レ之ヲ。

神供。千歳備レ之ヲ。口伝也。

神酒。脇備レ之ヲ。

神酒、御灯、瓶子口等口伝有。

一、神供咒文。口伝。

一、神酒咒文。口伝。

右頂戴之節、品有レ之ヲ也。

今ハ

一、三宝ニ熨斗。

神前

一、三宝ニ三寸洗米。本寸也。奉備、幕掛り前ニ頂戴スル。尤熨

斗モ同断。

一、手向太麻。口伝。

一、鉾持扇咒文。口伝。

一、護神身法此卷子細有。口伝。

一、神靈招請之太事。口伝。

一、十宝内縛印此卷子細有。口伝。

一、五臟安寧加持。口伝。

一、天神地神同体乃觀念。口伝。

一、幕上懸時岩戸乃印。口伝。

一、同、陰陽乃足踏アリ。口伝。

一、橋掛リ太事。口伝。

一、着座並神樂之太事。口伝。

一、心中折念。口伝。

一、翁所作之事。口伝。

仕舞付之事也。口伝。

一、とうくたたり再、文字之事。口伝。

一、三之哥咒文等。口伝。

一、翁帰並幕上入留。口伝。

付翁帰リ事。口伝。

一、神靈発遣太事。口伝。

一、内縛印明此卷子細有。口伝。

一、二日、三日、四日、千歳ウタイヤウカワル。同音モ同断。四日、セリフ田哥

ノ事。笛座着共ニカワル。口伝。

一、十二月往来。口伝。

翁之次第

天太玉命 千歳

印相之時、扇ヲ腰ニサス。印相給々、扇右ノ手ニトリ、左ニウ

ツシ、又右ニ如レ常モツ。

天兒屋根命 太夫

天鈿女命 三番三

是ヲ四宮神ト云。

手刀雄命 脇

笛吹大明神 笛

高嶋明神 小鼓

源太夫神 大鼓

熱田大明神 太鼓

八百万神 地頭後見

一、父尉ハ 白鬚大明神。

一、延命冠者ハ 西宮太神宮。

復云。

武持神 千歳

春日三之御殿 翁也

住吉大明神 三番三

笛吹大明神 笛

蛙子 小鼓

駿河浅間 大鼓  
 源太夫神 太鼓  
 八百万神 地唄後見  
 如斯モ云。

極秘書

一、翁ハ惣して神代神樂の作法也。むかし日神岩戸に引籠り  
 たまふ時、諸神しう会して神わさ有しに、天細女命か舞  
 し給ふ。是則根元也。神代のむかし日神納受あり。いわ  
 んや下界の神にをいてをや。委ハ口伝ニテアリ

一、第一翁ト云ハ

太玉神

千歳振也。

第二

天兒屋根命

神道翁也。

第三

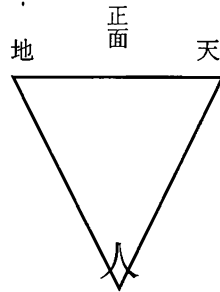
天鈿女命

三番申樂也。

天のうすめ鈴をふり、神樂を舞たまふ。この時岩戸をお  
 しひらき給ふ。その時しよ神、あわれ、あなおもしろ、  
 あなたのし、あなさやけ、ほけく。

是神樂の根元、神道ちやうくの極秘也。口伝重々有。

翁舞の内



天地人三才の拍子、陰陽等秘事有之。口伝云云。

一、神功皇后三韓御たいしの時、九州筑前の國はかたのこお  
 り、諸軍勢を集テ大酒給ふとき、烏帽子狩衣を着したる白鬚  
 の翁来テ神功皇后に申やう。なんしよのせとを御渡りある間、  
 供奉申へしと申す。大酒たまふ時、武持神舞給ふ。是を後に  
 武内神と云。武内の宿祢なり。宿祢ハ氏也。この後件の翁ま  
 ひ給ふ。今申樂に用翁ハ是を表也。然るに三かんをしたか  
 へ給ひて後、神託（マタ）によりて住吉大明神とする也。当座にお  
 いてしらする也。武持の舞則千歳振也。天照太神、住吉大明  
 神同一体也。

三番申樂ハ 興玉神也。

鈴之事

一、神代ヒコ今乃鈴ヒあらす。榊竹カサネ乃葉ハ振玉ヲ也。依テ鈴ノ柄ヲ昏ニテ  
つ、ミ、中に榊竹ノ葉ヲ入也。数其儀口伝。今ハ不包也。

再鈴ノ伝ト授有。

一、おさへくおう。此儀口伝也。

復ニ云。

天神地祇人神ヲ祝祭り祈念心持アリ。

初日ハ天神、二日ハ地神、三日ハ人神也。故ニ初日ハ千秋万歳ヲ云。

天の如ク長久なる心也。二日ハ田うへの事ヲ云。地徳ヲ祝心也。

三日ハ子孫繁昌ノ事ヲ云。人神ヲ祝祭心也。何茂陰陽ヲ表、天地

人ニ三才ヲ備タルニヨリテ神明の内證ニ叶。爰ヲ以祈念之心持、感心極

秘也。

風流之事

一、天神地祇感応したまふ故ニ万物ノ精靈顯レ出テ舞かなて奉レ

祝心也。能ハ神楽より出たり。神楽の根元前如レ書岩戸

の前の作法也。天地の有情非情共ニ目出度事なれハ頭ハ

れ出奉レ祝心也。物の精靈出能ヲ成テ唄かなつるは風流お

もしろき事となれり。口伝キ有。

開口之事

一、脇勤レ之。何にても脇能尤置鼓也。名乗ノ前ニ有レ之。古  
来ハ自分ニ作テ勤シ事也。今ハ

御前御能之節、開口云、被ニ仰付一勤事也。古來ノ事也夫ヨリ作テ脇  
江渡ノ事也

一、自ニ懷中一太麻袋開口出レ之、脇ニ渡ス。依テ一氣開、云ニ

開口ニ可レ秘々々。

脇請取、開口ヲ一氣開クマテ黙ス。口伝止云云。

一、四日ハ初日ニカエルト。

乍レ去四日ノ之器具ニ有レ之ハ帰ルト云ハ大方ノ事ニシテ品有レ之

ヲ云儀也。

一、翁ト大方書トモ本ハ於幾名ト書也。名を置ト云儀也。

一、翁ト書ニシサイアリ。口伝ニ有レ之。

翁所作之事

一、左ノ足ノ出、舞台真中ヨリ少地唄座の方江出たると思ふ程に

出、正面ムキ、左ノ足ヨリ出、右ニテトメ、左引。袖なおし左ノヒ

ガツキ、右ノ袖なをし、拜ニ。扱ヒガ立カエ立、左ノ足より

笛ノの上江行、目付柱ノ方江向、左ノ足右の方江スベラス心、

トクト下ニ居ル。尤、脇正面の方江向へし。千歳御面箱ヲ置ニ

角カケテ置ザルヤウニコノムベシ。扱、千歳座ニツキテ、三番

三仕手柱の内江入。笛大小共ニ座ニ着。笛座ツツキ吹。小鼓打ヲ

ロシテ、トウ〜ト唄。千歳角トル時ニ扇下ニ置、面ヲ両手ニテトリ、ヒボトキ左ノ手ニ持、右ノ手ニ袋ヲトリ、箱ノフタニヲキカクル也。尤、ヒボ後見ムスブ。「座シテ」ト箱ニ両手カケ、左ノ方ヨセ、「マイロウ」ト立テ、右ノアシヨリ出扇開。大小ノ前江行キ、正面ニテ、両手合せ、尤、正面ムク。扱手ヲノケ扇ロクニ立テアクル。「千早振」トウタフ。「ソヨヤ」ト左右ノゴトクアト江シテタツハイ。「千年の鶴」ト唄、「アリワラヤ」ト右ノアシヨリ右ウケテ左ニ廻リ、シテ柱ノキワニシカケノヤウニシテ拍子ニ「アレハ」トヒラク。正面左右ノコトクシテ出サシトメノゴトクメコシカ、メ、扇ヲウケノリニ、扱立「イヤイヤハホ、」ト出ル。尤、左ノ足目付柱ノ方江出「イヤイヤハホ、」ト留拍子三、是迄出ル。足数口伝。扱大臣柱ノ方江行、右出、右トメ拍子三、是迄。足数口伝アリ。是ヨリカマワス左ニ廻リ、左右ノヤウニシテ出、角江出、袖かつき、扇面の方江よせ、右廻リ、角左ノ袖マキ、スミトルヤウニシテ左ニ廻リ、大小ノ前左右ノコトク跡江シテ、コシカ、メ、扇下にてウケ、拍子三。扱アカリ、「千秋万歳」トウタフ。「万歳楽」ト左ニ廻リ、両手アワセ、「万歳楽」ト顔扇ノ方江下ル。扱箱ノ方ヘムキ、右ノアシヨリ出、右トメ、右ヒザツキ扇下ニヲキ、面又キ両手ニイタバキ、箱ノフタニヲキ、扇持、扱ヒサ立カエ、立テ、右出、フタイマンナカ、正面ムキ出、左ノ足トメ、右ノヒザツキ、扱扱居立、ヒサ立カエ、橋掛江向立、右ノアシヨリ出ル。

「タツホ、ホ」ニアワセテシテ柱ノキワマテアワセ、右トメ、是ヨリカマワス樂や入也。

太夫後見之事

一、太鼓ノアトヨリ出、笛ノ上江行イ。太夫、面カクル時ニヒホムスブ。太夫立テ後ニ面箱フタトリ、鈴取出、鈴ノ方ヲ持、千歳渡。黒色取出、地唄ヲ取次、後見座江渡ス。扱もとのこたくふたを置、太夫面箱ノ方江来ル時ニ見合、能所江ナラスベシ。太夫樂や江上前の後見切戸口ヨリ入ヘシ。アトノ後見ハ鈴ノ段過テ面箱シマイ、切戸口ヨリ持テ入ヘシ。

一、黒星印シ 極秘也。

数八ツアリ。 ■外如シルシ口伝ニアリ。

一、朱ノ印シ 口伝也。

数四十五アリ。

一、中臣祓

一、最要中臣祓

右、翁勤朝、可ニ相勤也。如レ此趣致ニ伝受、以レ略可レ

勤レ之也。

波羅伊玉意

喜余目出玉

一、猿樂ト云事、猿女君ノ名ヨリワコレリ。委ハ口伝ニアリ。



右、翁秘書、金剛代々家伝、雖<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>極秘<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>厚望<sub>一</sub>令<sub>二</sub>相伝書写<sub>一</sub>贈之候。毛頭他見無用。努々おろそかに不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>致者也。

年号月日

名判

誰殿

如<sub>レ</sub>斯認可<sub>レ</sub>贈。努々おろそかに不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>伝。又仕舞付之内朱引之下<sub>ニ</sub>一<sub>二</sub>三付<sub>一</sub>有。是ハ付間敷、只朱引斗可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之也。

宝永二歳<sub>乙酉</sub>九月吉曜日

金剛太夫坂戸久明〔印〕〔花押〕